巻頭特集

織田信長を苦しめた長島の一向宗

長島一向一揆 激戦の四年

木曽三川に囲まれた長島のまち。かつては何本もの川が乱流し、いくつかの島で成り立つ地域であった。戦国時代には、織田信長勢と一向宗の門徒をはじめとする地元住民との四年にわたる戦いが起こる。信長最大のピンチともいわれるこの戦い。信長にとって長島は、どうしても越えなければならない壁であった。

輪中の特徴を生かし経済拠点として栄えた

長島の人々は昔から水とともに生きてきた。周りに高い堤防を築いた輪中で、低い土地は水田に、高い土地は住宅に活用し、米を中心とした農業に励んでいた。当時は舟運が物流の主流であったため、人と物が集まる流通経済の拠点となっていた。「川から海のものが、山からも物資が届き、東海道の宿場町として人が集まり、かなりのにぎわいだったようです」と話すのは、願證寺の高木格英住職。東海地方でも有数の都市だった。

そのころ、親鸞上人によって起こされた浄土真宗（一向宗）は教勢拡大の真っただ中にあり、三河・尾張・美濃の三カ国にまたがって大きな勢力を擁していた。明応六（一四九七）年、伊勢地方への拡大のため、長島の杉江にあった願證寺に八世蓮如の子・蓮淳が迎えられる。「蓮淳が来たことで一気に格が上がりました。教勢著しい三カ国の中間に位置していた長島は好立地だったのでしょう」。

平和裏に教勢拡大につとめていた願證寺だったが、当時長島の地を支配していた伊藤重晴の圧政により、保護を求める人が現れはじめる。願證寺は伊藤一族を追い出し、一五〇〇年中頃にはこの地方の支配権を握ることとなった。

長島一向一揆勃発 三回におよんだ侵攻

力を拡大していた願證寺のもとには信長に敗れた落武者も頼るようになり、ますます力を高めていく。中でも信長に以前から反感を抱いていた鯏浦（現・弥富市鯏浦町）の服部佐京亮が行動を共にするようになってからは、公然と反信長派となっていた。

元亀元（一五七〇）年八月、本願寺の第十一世顕如は全国の門末へ信長と戦う意を記した檄文を飛ばした。長島とともに院家であった石山近在の江口や近江湖南・湖西でも即座に一揆が勃発する。

同年十一月、長島勢は信長の近江出陣中を狙い、弟の信興が籠る小木江城を攻撃。信興を自害させる。これが長島一向一揆のはじまりである。

長島に対して七回の侵攻があったと記録が残るが、大きなものは三回。初めて本格的な侵攻がされたのは元亀二（一五七一）年五月。岐阜に城を置いていた信長は五万人余りを率いて出陣し、桑名一帯の地侍の城館を次々と落とした。しかし、長島勢は織田軍を輪中に引き入れ、夜陰に紛れて堤防を切り、濁流の中へ閉じ込めたり、山際から攻めたり、太田川を舟で遮るなどのゲリラ戦法を実行。織田軍は柴田勝家が負傷、氏家卜全が討死するなど多数の侍大将を失った。まさに自然の要塞。地の利を生かした戦法で信長勢を撃退したのである。

天正元（一五七三）年九月、二回目の侵攻が決行される。織田軍は南濃町（岐阜県海津市）に陣を置き、桑名・員弁地方の門徒末寺と願證寺に心を寄せる土豪をせん滅し、城や砦を築いて激しく抵抗した北勢地方の勢力を次々と無力化した。しかし、ここでも門徒たちは反撃。長島城を攻めることなく大垣へ戻っていった。

水郷輪中を攻めることの困難さに危機感を抱いた信長は、長島の勢力を抑えようと周辺の調略に取り掛かる。四日市や亀山などの豪族に養子縁組をするなどして味方につけていった。

天正二（一五七四）年、織田軍は楠、白子、津、知多などから集められた兵を舟に乗せ、長島を囲む大河を埋め尽くし、兵糧攻めにした。三カ月にわたる籠城戦が続いたが、食料不足から餓死者が続出。二つの砦は落ち、脱出した数千人余りが斬り殺された。

九月二十九日、長島方は降伏を申し出て、信長はこれを許した。生き残った者は舟で退散したが、待ち構えていた鉄砲隊に狙い撃ちされた。残っていた二つの城の周りには幾重もの柵が設けられ、四方から火を放たれて二万人余りが焼き殺される結果となり、長島は壊滅。「天下統一のために西へ進む信長にとって、通り道である長島は岐阜へ帰るときに邪魔になると考え、皆殺しという結果になったのではと思います」と高木住職は推測する。

現在に受け継がれる一向一揆の遺構

現在、本坊として隆盛を極めた杉江の願證寺跡は明治の河川改修工事により、長良川の底に沈む。又木にある現在の願證寺は、文禄四（一五九五）年に秀吉の命により再建されたものである。江戸時代は長島御坊として君臨し、その後、本山より認許され、現在に至る。

戦いの主な舞台となった長島城跡には長島中学校・長島中部小学校が建ち、「歴史を伝え続けたい」との思いから、長島城をイメージした造りとなっている。

また、一揆の際に石山本願寺から寺侍として送り込まれた僧侶たちが教勢の挽回のために六つの寺院を創設。それらが「長島六坊」と呼ばれ、長島町には深行寺、善明寺、源盛寺、光栄寺の四つがある。

「『死ねば極楽浄土』の教えを説いた浄土真宗。戦国動乱の世、死と背中合わせだった人々にとって、信仰こそが人生の拠り所となっていたのではないでしょうか」と高木住職。

天下分け目ともいえる四年間にわたる壮絶な戦い。信長がここまで苦戦したのは、水防などから地域の結集力が固かったことも理由のひとつといわれている。洪水などに悩まされながらも資本を築き、時の戦国武将と戦った歴史を私たちは受け継いでいかなければならない。

【参考文献】『一向一揆論』吉川弘文館

願證寺住職・高木格英さん
「ここには一向一揆についての話を聞きに多くの人が訪れます。まずは地元の人たちにこの出来事を知ってもらいたいですね」

長良川の川床に沈む願證寺跡地

1・2_明治時代の河川改修工事前（1）の長島の地形と改修後の地図（2）。土地勘のない織田軍が苦戦したのも無理はない。この地図は輪中の郷で見ることができる　3_又木の願證寺。建物は江戸時代からのままだ　4_境内にある長島一向一揆殉教の碑。昭和50（1975）年に400年の追悼法要が行われた　5_長島城はこのように川岸にそびえ立っていたとされる

information

浄土真宗 本願寺派
長島山 願證寺
桑名市長島町又木181-3
電話0594-42-2550

文／青野穂波　写真／田中眞介　デザイン／ABBEY ROAD